



「いいね」のために

昨日の朝日新聞（耕論）の欄に、

今年の「新語・流行語」の年間大賞に「インスタ映え」が選ばれた。多少ウソでも、中身を盛っても「いいね」が欲しい。この空気はなぜ生まれ、どこまで広がっていくのか。

という問いかけがあり、それに3人の方が答えているのだが、その中から宮台真司さん（首都大学東京教授、社会学）の答えを引用してみよう。若者の本質を突いているのでは。

＊

「空虚な承認」わきまえて

実際より見栄えのいい、多少ウソが入った写真を投稿しても、ネットで「いいね」を欲しがる「インスタ映え」の現象は、社会からの承認が欲しいのに得られない、という不安の埋め合わせです。

特に若い世代は、この社会の中に座席がない、ということを極端に恐れています。社会の承認のベースとなる仲間がいないからです。

学生たちを見ていてもそうですが、けんかもしないし、本音もいわない。表面的な、損得勘定のつきあいです。それでは仲間はできない。仲間とは、いざとなれば自己犠牲もいとわない、「損得」より「正しさ」を重んじるつながりです。なのに若い人たちは、けんかを通じて肝胆相照らす、といった深いつきあい方を知らない。トラブル回避を優先するという育てられ方をしてきたためでしょう。

だからこそ、不特定多数から「いいね」を募れるフェイスブックやインスタグラムは、埋め合わせとして都合がいい。フォロワー数、「いいね」の数は、一種の得点。それによって、自分が社会の中でどれだけの濃度で存在している

かを計測し、かりそめの承認が得られた気になる。

ただそれは、不安をごまかす、一種の病的な反復行為です。不安の原因は、仲間がいないという現実なのだから。

ソーシャルメディアで重視されるのは、反応の早さ、ノリです。そこに熟慮とか主体性が見えてはいけません。即座に反応する「自動機械」になることが求められます。

私のゼミの学生には、そういう自動機械的コミュニケーションを禁止します。初めは戸惑いますが、次第に主体性が表れて、自分が本当に思うことを表現するようになる。そういった経験が積み重なれば、自動機械から抜け出す最初の一步になります。

さて、個人のレベルでは「いいね」が空疎であっても、社会のレベルでは、単に無視して済ますわけにはいかない。実際、リアルな社会に影響を与えるからです。

「いいね」がたくさん集まって「風」が起きると、人がそれになびいて動くのです。損得勘定からいえば、流れに乗る方が得、だからです。

先日の総選挙がまさにそうでした。人を巻き込む、人を動員する戦略を考えるのであれば、こうした数字は重要です。政治でも、企業でもNPOでも、人を動員するツールとして、今はソーシャルメディアの「いいね」数やフォロワー数を活用しないと損をするのが現実です。

かつてのような、職場や先輩後輩などの仲間のつながりを通じた動員は、もはや機能しない。それを代替するのがソーシャルメディアです。

「いいね」は、そんな空虚さと効果とを、わきまえながら使うべきツールなんです。